

2024.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

5号

第46巻
No.418



ショウブ *Acorus calamus* L. (サトイモ科 *Araceae*)

生薬 ショウブコン（菖蒲根） 冬、地上部が枯れる時期に根茎を掘り取り、ひげ根を除き水洗、陽乾する。

成分 精油：asarone, asarone, asarylaldehyde, eugenol, methyleugenol, calamene, calameone, calamine, acorone, isocalamendiol, acoronene 等。

効能 同属のセキショウコン（石菖根）は鎮静、鎮痛、健胃、駆虫薬として用いるが、ショウブコンは飲用すると吐き気を催すことがあり、服用には適さない。主に浴湯料として利用され、神経の緊張をほぐし、血行を良くしリュウマチや神経痛、不眠症に効果がある。



生薬 ショウブコン（菖蒲根）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



菖蒲は昔から二種類有るとされ、中国でいう菖蒲はセキショウを原植物とし、水菖蒲、泥菖蒲、白菖蒲の原植物をショウブとしています。日本ではショウブの根を菖蒲根、セキショウの根を石菖根とするため中国との間で混乱が生じています。

ショウブは日本、朝鮮、中国などの東アジア、シベリアからヨーロッパ、インド、北アメリカなど北半球に広く分布し、池や沼などの水辺に生育する多年草です。高さ60-100cmで全体に芳香があり、地下を這う根茎は太い円柱状で筋があり、その下部からヒゲ根を生じます。葉は根茎の先端に直立叢生し、剣状、線形で長さ60-100cm、幅1-2cm、鮮緑色で光沢があり、中脈が高く目立ちます。5-7月頃花茎基部の苞葉の間から円柱状

の肉穂花序を出し、淡黄緑色の両性花を密につけます。同属のセキショウは本州、四国、九州、朝鮮、中国、台湾、シベリア、インド、インドシナに自生する多年草で、根茎は芳香があり、ショウブより細く、横に這い、分岐して広がります。葉は長さ20-45cm、幅5-10mmの扁平な剣状で、基部は2つ折りになって内側の葉を挟みます。葉脈が数本ありますが、中脈は不明瞭です。3-5月に先が尖る淡黄色の肉穂花序を出し、黄色から黄緑色の花を咲かせます。

中国・南北朝時代の『荆楚歳時記』(6世紀)に「五月五日、……艾を採りて以て人を為り、門戸の上に懸け、以て毒気を禳う。菖蒲を以て、或いは鏤み或いは屑とし以て酒に泛ぶ」と魔除け、厄除けに菖蒲を用いたことが記され、後に日本に伝わったようです。『続日本紀』(797)に「是日、太上天皇召して曰ふ、昔、五月の節には、常に菖蒲を用ひて縵を為れり、此来、此の事已に停む。今より後、菖蒲縵に非ざる者は宮中に入ること勿れ」とあるように、菖蒲や艾のような魔除けの植物を頭に載せて鬘につくる風習も中国から伝わりました。『延喜式』(927)には「凡五月五日薬玉料、昌蒲、艾」とあり、「薬玉」に変化していきました。『枕草子』(平安中期)に「節は五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。九重の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとにしげく葺かんと葺きわたしたる、なほいとめづらし」とあるように御所から庶民の家の屋根までショウブを葺く風習も生まれました。他に五月四日の夜、邪気を払うまじないにショウブを短く切って薄い紙で包み枕(そうぶのまくら)を下に敷き、邪気を払い、翌日の五日に枕を細かく刻み、袋に入れて沐浴をする行事がありました。また、「菖蒲の根合わせ」という長命を願った遊びもありました。

「あやめぐさ」の名は平安時代の『本草和名』(918)、『倭名類聚抄』(931-937)に「昌蒲 和名阿也女久佐」の名がありましたが、室町時代になると花の美しいアヤメ科のアヤメ(*Iris sanguinea*)を「花あやめ」と呼び、やがて「花」がとれて「アヤメ」となったため用いられなくなって行きます。「ショウブ」の名が現れるのは、『源氏物語』(平安中期)の「乙女」や『枕草子』(平安中期)の「なまめかしきもの」に「さうぶ」の名で呼ぶようになった頃からと思われます。しかし「ショウブ」の名も江戸時代にノハナショウブ(*I. ensata*)の園芸種を「ハナショウブ」と呼ぶようになり混乱するようになりました。

北半球に広く分布することから、古くから薬、香料として利用されてきました。インドでは「アーユルヴェーダ」で風邪、咳、喘息、蓄膿症、関節炎、てんかんなどに使われ、エジプトの医学書『エバース古典』(BC1550頃)には「聖なる煙」と呼ばれる「キフィ」にショウブが使われています。またディオスコリデス(40-90)の『薬物誌』には服用すると利尿効果があると記されています。(村上守一 記)